

はじめに

西川長夫

今回の報告書(4)には、松下清雄の半世紀をこえる旧友であり、政治的文学的同志でもあった中島誠氏の書評「松下清雄の巨大作品『三つ目のアマンジャク』」とともに、松下清雄蔵書目録の後半(3)を取めることができた。中島誠氏の御好意に厚く御礼申し上げるとともに、貴重な蔵書を御寄贈いただいた御遺族や、蔵書の整理と目録作成に尽力いただいた方々にも改めて感謝の気持ちを記させていただきたい。

なお中島誠氏の書評は『コモンズ』の前身である『未来』紙に掲載されたものである。転載を許されたことに感謝したい。

中島誠氏歴史、文学政治など広い領域で活躍されている著名な評論家だから改めての紹介は不要だろう。この書評は、短く断片的なものであるが、1,300ページに及ぶ『三つ目のアマンジャク』の世界を一挙に私たちに近づけてくれる。さすがに五十数年来の友人の、本質をついた素晴らしい文章だと思う。一人でも多くの読者がこの書評をきっかけに『三つ目のアマンジャク』の混沌とした言葉の滝に打たれ、「魂のマグマ」に触れてほしいと思う。中島氏の文章は農村や農民的な世界がいかなるものであり、それをとらえるにはいかなる方法がありうるか、そして農民的なものの喪失は何を意味するかについて改めて考えさせてくれる。

なお今回の報告書には、中島氏と同様に、松下静雄氏の旧友であり、政治的文学的同志であつたいだも氏の長文の追悼文「ホメーロスの『イリアス』『オデッセイ』の英雄叙事詩の一時代を承けて」を掲載する予定であったが、手書きの原稿の「解説」が困難をきわめて思わぬ時間をとり、さらに校正原稿にも同じ問題が生じて、ついに今回の掲載は断念し、次回に譲らざるをえなかった。御了解いただければ幸いである。

